A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI

TOSABUSHI

とさぶし

高知県は、ひとつの大家族さき。

高知家

No 49

kochi 再発見 discovery 新発見

TAKE FREE

今も息づく城下町文化

お城が見守るまち

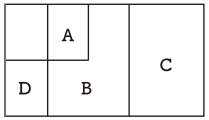
今も息づく城下町文化
お城が見守るまち

街中から見上げると目線の先には高知城！

市街地のいたるところからお城が見えることは、高知市民にとっては日常的だが、実は全国的にはとてもめずらしいこと。「お城とまちの近さ」は、高知らしい文化のひとつだ。

今から400年以上も昔の江戸時代に、この地につくられた高知城と城下町。時代が下って人や建物は姿を変えても、まちの形は驚くほど受け継がれている。今回の特集では、今も残る「城下町文化」をご紹介します。

慶安5年高知廓中絵図（高知市立市民図書館蔵）



地図中の今と昔

A 高知城
周囲を堀に囲まれた部分が高知城。現在はお城を含む「高知公園」や、さまざまな県立施設がある。

B 郭中エリア（6ページ）
藩主に使える武士たちの屋敷があったエリア。追手門の門前には、道幅がやや広い「追手筋」が既にこの時代にあったことがわかる。

C 下町エリア（7ページ）
現在の高知市はりまや町周辺。各地から町人や職人が移り住んだ港町で、「城下町の台所」としてにぎわっていた。

D 上町エリア（8ページ）
現在の高知市上町周辺。下町とは対照的に、武家に召し仕える奉公人たちのまちとして整備され、後に職人や商人も暮らした。

古地図をひもとけば高知のまちの姿がそこに

北は江ノ口川、南は鏡川を天然の水堀として整備された、高知の城下町。川と川に挟まれた山にあることから、高知城は当初「河中山城（こうちやまじょう）」という名称で、これが現在の「高知」の由来となった。

高知のまちは高知城とともに江戸時代から続く暮らしの文化

「高知市で暮らしていると、江戸時代の城下町から変わらず残っているところも多いと感じる」と話すのは、高知県立高知城歴史博物館で資料学芸課長を務める藤田さん。今の高知市街地の決定的なルーツは、慶長6年（1601年）に土佐国藩主となった山内一豊（やまうちかつとよ）が整備していった、高知城とその城下町だ。高知城の周辺に武士が移り住み、その生活を支えるために、奉公人や生産者、職人、商人たちが住むまちがつくられていったが、その当時の町割り（都市計画）は、今も大きく変わっていないという。「高知城は当時の政治や行政を担っていた場所だったけれど、今もお城がある丸ノ内には同じように県議会の議事堂や県庁がありますよね。追手筋などのメインストリートには学校や病院といった公共施設があって、その裏路地には、繁華街や商店など、庶民の暮らしのエリアがある。そのちょっとごちゃっとした街に足を踏み入れると、なんだかわくわくしてきたり。お城を中心にして『ここにこういうものがあると便利だよね』といったまちの根本となる機能とか、江戸時代からの町人街の感じ方って、変わったようで変わっていないなと思いますね」。

江戸時代後期の「土佐年中行事図絵」（高知県立図書館蔵）。にぎわっている歳暮の夜店の様子。

教えてくれたのは
高知城歴史博物館
資料学芸課長
藤田（ふじた） 雅子（まさこ）さん

「とさっ子タウン」面白い仕組みですね。興味がわきました。（高知県・40代）

はみだしコラム

江戸時代に建てられた本物の城郭が今も残る高知城は奇跡の名城！

「地元の方に『え、高知城って国宝じゃないの！』と驚かれることは、よくあります」と話すのは、長年、高知城の魅力を発信してきた島崎さん。実は高知城は、昭和9年に「国宝保存法」により一度国宝となったものの、昭和25年には「文化財保護法」という新しい法律によって、「国指定重要文化財」の指定となり、国宝ではなくなっている。「でも、高知城に親しんできた県民は、当たり前に『国の宝だ』と感じているのでは」と島崎さん。実際にその価値を振り返ると、今の高知城の天守（城の中心的な建物）は、寛延2年（1749年）に再建された本物の江戸時代当時のもの。また本丸（天守を中心とする建物群）の建造物（11棟）が全て残っているのは、日本全国でも高知城だけだという。「あまりにも暮らしの一部になっているので気付きづらいかもしれませんが、高知城は奇跡のような存在のお城。海外からの観光客も多くなっているので、地元の方にこそ自慢に思ってほしいですね」。

土佐史談会 理事 島崎（しまさき） 順也（じゅんや）さん

高知城の主だった山内家の親族とも交流があり、「高知城を国宝にする県民の集い」では事務局長も務める。

日本のお城の要、本丸の姿は当時のまま！

高知城の本丸の建物群は、当時の姿からほぼ完全な形で現存している。これは日本で唯一のものであり、とても貴重なんだとか。天守の忍返（しのびがえし）や土塀の物見窓（ものみまど）も、現存しているのは高知城だけ！

私はココが自慢！

伊野商業高等学校 3年 西本（にしもと） 采可（さいか）さん

お城の仕掛けを見つける楽しさ

ツーリズムコースに通いながら、授業の一環で高知城のガイド活動も行なっている西本さん。自慢の見どころは三ノ丸から二ノ丸に上がる階段と、お城の外壁にある石落とし。「何の気なしに歩いていると気がつかないような仕掛けが面白いんです！」。県内の方にも高知城の魅力を再確認してほしいと活動を続けていく。

当時の職人技をじっくりと！

高知県の観光関連の仕事にも携わっていたという渡部さんは、大のお城好き。「見どころはたくさんありますが、近江の穴太衆（あのうしゅう※）が手がけた、自然石を積み上げた石垣！ 当時の最高技術だと思うと、時間を忘れてじっくりと眺めちゃいますね」。※安土桃山時代に活躍した石工（いしく）の集団

会社員 渡部（わたなべ） はるかさん

追手門から続く「守りの構造」

城内の縄張り（設計）の様子を、当時の姿をそのままに残していることも高知城のポイント。追手門から本丸・天守までどのように防衛するか。江戸時代のお城の構造を教科書のように残していることも価値が高い。

天守閣の外を歩けるのは実はレア！

高知城では、天守閣の外側につくられた回廊を歩きながらまちを見ることができるが、実は天守閣の回廊に出て歩ける現存天守のお城は、国内で高知城と犬山城（愛知県）のみ。高知城にはさらに、豪華な漆黒塗りの高欄（こうらん）まである。

高欄

あらためて高知城、

まちの生活に溶け込む高知城。地元住民にとってはあまりにも見慣れた存在だが、「あらためて」注目してみると、自慢したくなるようなことがてんこ盛り！高知城を愛する方々に語ってもらいました。

高知大学 学生
坂東（ばんどう） 孝紀（こうき）さん

水を治めたお城のシンボル！

「城郭が好きで、高知城歴史博物館でもアルバイトしています！」という坂東さんが自慢するのは「石樋（いしどい）」。高知の豪雨を克服した高知城が誇る排水設備で、特に写真のように石垣から突き出したものは、全国的にも非常に珍しい。お城にまつわる「日本城郭検定」でも出題されるほどなのだとか。

市街地で季節の変化を感じられる場所

「敷地には、適度な坂や階段があり、ランニングにも最適なんです」と話すのは、陸上トレーニングで頻繁に高知城を訪れている村場さん。日々足を運ぶことで季節ごとに変化する「お城の自然」も感じられ、鐘撞堂（かねつきどう）の桜の美しさや鳥のヤマガラと遊べるポイントも自慢なのだとか。

陸上競技コーチ
村場（むらば） 伸也（しんや）さん

高知と言えば、酒とアテ。追及して欲しいと思います。（高知県・50代） はみだしコラム

当時の郭中

高知御家中麁図（安芸市立歴史民俗資料館蔵）

武家の名がひしめく古地図

19世紀初頭頃の郭中。武家の屋敷が立つ区画の間には、すでに「追手筋」や「帯屋町」の名前もある。帯屋町筋（御屋敷筋（おやしきすじ）とも呼ばれた）は、郭中で最も長い目抜き通りだった。

武家文化の中心地

ひろめ市場の名称は、同地に土佐藩の家老、深尾弘人（ひろめ）の屋敷があったことにルーツがある。ちなみに弘人は通称で、本名は蕃顕（しげあき）さんなのだとか。すぐ裏手の追手筋では、江戸に向かう藩主を家臣たちが見送っていたという。

ひろめ市場周辺

高知の城下の歩き方

高知市の中心市街地を歩いてみると、今も息づく江戸時代の城下町の文化を見つけることができる。郭中、下町、上町の3つのエリアに分かれていた城下町を、それぞれに詳しい案内人と巡ってみよう！

郭中（かちゅう）エリア

山内家の家来である武士たちが暮らした場所 現在の市街地のルーツもたくさん！

「郭中（かちゅう）」とは、藩主である山内家を支えた武士たちが暮らしていた場所の名称で、現在の追手筋や帯屋町などの繁華街がある、まさに中心エリア。江戸時代は高知城を中心にたくさんの武家屋敷が立ち並んでおり、お城に近づくほど格上の武士が住んでいて、屋敷も広かったのだという。案内人を務めてくれた横山さんは、「例えば、現在のひろめ市場がある区画には、『深尾家』という家老の屋敷がありました。最も格の高い家臣だったので、一つの家だけであれだけ広い一等地を占めていたんです」と言う。現在の繁華街とは異なるやや格調高い印象の郭中だったが、実は追手筋や帯屋町といったまちの名称が生まれたのもこの時代。「現在、日曜市でにぎわう追手筋は、もともとは大門筋（おおもんすじ）という名前。18世紀半ば、大火で焼け落ちてしまった高知城を再建する際に、あわせて現在の「追手筋」に名前が改まったようです。再建されて今も残る高知城と追手筋という名前は、実は同じタイミングで生まれたんですよ」。

案内してくれたのは

高知県立高知城歴史博物館 副館長

横山 和弘（よこやま かずひろ）さん

県外から来た修学旅行生たちの案内講師や、土佐の武家文化を訪ねるまち歩きイベントなどでガイドを務めている。

観光ガイドとは違う視点の記事で、新鮮です！（大阪府・30代） はみだしコラム

下町（しもまち）エリア

多様な町民が集まった水辺のまち 古い町名や街路ににぎわいを感じる

現在のはりまや町周辺に広がっていた「下町（しもまち）」は、職人や商人が多く暮らしていたエリア。「土佐の歴史散歩の名人」と名高い吉澤さんは、「下町は、多様な場所から集まった町民たちでにぎわっていた、水辺のまち」だと言う。下町にあった古い町名をひもとけば、京都の商人が移り住んだ「京町」のほか、かつては山内一豊の旧領地だった掛川（静岡県）の職人たちが住んだ「掛川町」、かつて土佐にあった浦戸城や山田城などの城下町から町民が移り住んだことにちなんだ、「浦戸町」や「山田町」なども存在していた。そして、それらをつないでいたのは、小舟が行き交う水路だった。「現在は浦戸湾から『かるぽーと』の前まで流れている堀川ですが、当時はさらに先の今の『高知大丸』や廿代町（にじゅうだいまち）辺りまで繋がっていたんですよ」。親水公園のつくりをしている「はりまや橋公園」も、以前は本物の川だったのだ。当時を想像しながら、古地図を手に小舟に乗ったつもりで散策してみるのも楽しい。

教えてくれたのは
ひまわり乳業株式会社 社長
吉澤（よしざわ） 文治郎（ぶんじろう）さん
ブログ執筆をきっかけに、40歳頃から本格的に郷土の歴史を独学で学び始める。現在、「土佐史談会」の理事。

はりまや橋公園

高知下町浦戸湾風俗絵巻（高知市立市民図書館蔵）

江戸時代の堀川をたどって歩く城下町散歩

「水辺こそ庶民の文化がにぎわう場所」と話す吉澤さん。江戸時代後期の古い絵巻には「播磨屋橋（はりまやばし）」も描かれており、その下を小舟が進む堀川が流れている様子がわかる。はりまや橋公園には、明治期にあった鋳鉄製のはりまや橋も残されている。

かるぽーと前交差点

人や物が行き交った川の交差点 城下町の東の中心地に

高知市九反田や菜園場町を見る交差点は、当時は、堀川と新堀川がクロスする川の交差点だった。城下町の水辺の玄関口であり、食料や木材、商品といった物流の要所になっていた。

今一番興味深いのはアンパンマン。歴史や観光スポットを教えてください。（高知県・20代） はみだしコラム

上町の町人たちが自力でつくったまちを眺める

鏡川にかかる「月の瀬橋」から上町を見る。河川敷沿いにある場所が旧築屋敷。周辺を歩くと、堤防の外側に石垣を積んで住居の基礎がつくられていることがわかる。

旧 築屋敷

車瀬公園

商人の仕事場の足跡を感じられる場所

江ノ口川と接した公園。「車瀬」という名前は、江戸時代、江ノ口川に水車をかけて綿実（めんじつ）から油を絞っていたことに由来する。子ども時代の龍馬も、この場所で遊んでいたという。

上町（かみまち）エリア

歴史ファンも訪れる城下町文化が残るまち 坂本龍馬を生んだ町人たちの足跡

城下町の「上町（かみまち）」エリアは、現在も高知市上町としてその名を残している。まちを歩くと道路が東西南北にまっすぐと引かれていることがわかるが、これも江戸時代につくられたもの。上町は、武家に仕える奉公人をはじめ、商人や職人など、城下町の人口が増えたことで土佐藩によって計画的に整備された。幕末、坂本龍馬が生まれ育った場所でもある。そんな上町で見かけるのが、観光客を案内するボランティアガイドの姿。ガイドの一人の川上さんによると「龍馬さんが好きで、観光客と交流したいとガイドになる方も多いですね」とのこと。今回案内してくれたのは、当時の町民のエネルギーを感じられる場所。「上町には『築屋敷（つきやしき）』という場所があって、これは藩ではなく町民が自分たちで新しく開発したまち。上町には、制度上は低い身分とされても、高い才覚や発想力、財力を持つ町民たちがいて、それが龍馬さんのような時代を変えた人物を生み出していったんだと思います」。

土佐観光ガイドボランティア協会

川上（かわかみ） 隆幸（たかゆき）さん

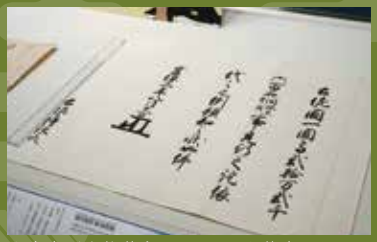
定年退職後に観光ガイドの活動を始めて8年目。青色のユニフォーム姿は、高知市の観光風景のひとつになっている。

素敵な場所の紹介を楽しみにしています。高知を堪能したいです。（高知県・20代） はみだしコラム

高知城歴史博物館で土佐藩・山内家のリアルに触れる

江戸時代・武家文化の姿がここに土佐の歴史を発見できる史料の数々

土佐藩主だった山内家には、江戸時代の書状や絵巻をはじめ、美術品や工芸品など、およそ6万7千点もの高知ゆかりの史料が残されている。それらを保存・継承している「高知城歴史博物館」には、高知城を訪れる観光客はもちろん、実は県外からの修学旅行生も多く訪れている。高知市の市街地には武家文化の足跡がわかりやすく残されているため、山内家伝来の史料とあわせて、江戸時代の伝統文化を学ぶにはうってつけの場所として全国から注目されているという。高知城歴史博物館は、土佐藩の歴史を通じて、日本の江戸時代のリアルな暮らしを垣間見ることができる場所なのだ。土佐国の絵地図に圧倒される導入展示室や総合展示室にある実物の資料は、季節や話題にあわせて60日を目安に入れ替えられるため、何度訪れても発見があるはず。



山内家が土佐藩主であることを幕府から認められた書状。弱い立場の外様大名だったからか、山内家は幕府の手紙などを数多く残していた。

展示では城下町の構造などもわかりやすく解説している。現在の高知市に受け継がれている、当時のまちの姿に触れることができる。

高知の城下町の暮らしが垣間見える

現在の県立文学館の辺りにあった「藤並神社」を伝える絵巻。山内一豊らを祀った神社で、祭礼行列が城下を練り歩いた。

現在のまちで江戸時代の歴史散策をしたら、お城の目の前にある高知城歴史博物館で、山内家に伝わってきた当時の本物の資料に触れてみよう。実物の資料に、江戸時代のリアルな暮らしを感じてみて。

高知はいいとこですね。鰹のたたきのことも、もっと知りたくなった。（大阪府・40代） はみだしコラム

今も息づく

江戸時代に築かれた高知城と城下町は人々に受け継がれながら
その時代ごとに新しい文化や風景も見せている。
令和の時代、お城があるからこそ見える高知らしい情景を訪ねた。

お城の石段は トレーニングに最適！

夕暮れ前の高知城。かつて武士たちが歩いた長い石段を黙々と駆け上がるのは、土佐女子中学高等学校のバドミントン部の部員たち。こちらの石段を使った階段ダッシュを、持久力をつける日々のトレーニングに組み込んでいるという。観光客などから聞き覚えのない方言で声をかけられて驚くこともあるが、息を切らしながらもハキハキと受け答えをして、さっそうと走っていく。自身も同校のバドミントン部だったという顧問の浜田千佐（はまだちさ）先生は「私が在校していた頃より、ずっと前から行われているトレーニング。おそらく50年ほど続いているのでは」。土佐女子中学高等学校は、もともと武上の学校（教授館）があった場所。お城と生徒たちのつながりは今日も続いている。

同校のバドミントン部は現在、県大会トップの成績を誇る。さらなる高みを目指し、今日も石段を駆け上がる。

訪れた人の印象に残る 城下の自由な将棋対局

高知城に隣接する「藤並公園」では、毎日のように青空将棋が指されており、お城を訪れた方なら一度は見かけたことがあるだろう。実はこちらの集い「高知城と追手門をバックに、自由気ままに将棋を楽しむ」ことを目的に「藤並将棋会」という名前で、かれこれ75年近く続いているコミュニティ。毎日、昼過ぎになると人が集まり、どこからともなくテーブルと将棋盤が設置されて対局が始まる。休日ともなると、対局待ちをする見学者も出るほどの盛況ぶりだ。現在の参加者は70～80代が中心。毎日家から歩いてくる常連も多く、将棋を楽しみながら城下の風情ある風景の中でリフレッシュしたり、健康づくりにも役立てるなど、各々がここに来る理由を教えてくれた。

学生や社会人も気軽に立ち寄って、対局を楽しんだ頃もあったそう。

令和の城下町の光景

令和の高知城は多様な観光交流の場に

海外からのクルーズ船が寄港することもあり、近年ますます多くの外国人観光客が高知城を訪れている。そのため高知城は、江戸時代の文化を伝えることはもちろん、観光や文化芸術関連など、さまざまなイベントの会場としても活用されている。令和6年10月には、高知の歴史的な魅力や価値を音楽などの文化活動とあわせて伝えようと取り組みを進めている「こうち文化福祉振興財団」が、高知城内の丸ノ内緑地にてジャズイベントを開催。インバウンドの観光客と地元県民およそ4400人が来場する盛況ぶりだったという。ステージでは「土佐音頭」や「しばてん踊り」といった土佐の伝統芸能も披露された。令和の時代、高知城は海外と地元の交流の場としてにぎわっている。

お城の動物園は今も市民の動物園に

かつて「お城の動物園」として親しまれた動物園が高知城の敷地内にあったことはご存知だろうか。昭和25年の「南国高知産業大博覧会」をきっかけに開園したこちらには、当時、クマやヒツジ、ペンギンなど、55点の動物たちが暮らしており、さらに現在は高知県内で見ることができないゾウまですぐ間近で眺められたという。獣医師兼飼育員であり、閉園時に勤務していた渡部孝（わたべたかし）さんは、「見上げると、高知城の天守閣が丸見えでした。お城を見ながら動物の世話をすることは、今考えると不思議な感覚でしたね」と振り返る。42年にわたり愛された「お城の動物園」は、平成5年に開園した、現在の「和の森わんぱーくこうちアニマルランド」に移転。今も地元住民に愛されている。

「お城の動物園」の時代から今も「和の森わんぱーくこうちアニマルランド」で元気に暮らしている、チンパンジーのタローとシュバシコウのダイ。

田舎のおじいちゃんに会いたくなった。特に川遊びなどをしてみたい。（岡山県・50代）　はみだしコラム

土佐藩主ゆかり 献上品の話 三

かつて藩主や幕府に納められていた献上品は
どんな思いが込められ、作られていたのだろう
その歴史や先人達の思いに触れるべく
今も暮らしの中に「当たり前」に存在する
3つの品にスポットを当てた

六十余州名所図会 土佐 海上松魚釣（高知県立高知城歴史博物館所蔵）

土佐清水市 かつお節

幕府にも愛された土佐清水の鰹節

今に伝わる鰹節が世に出回るようになったのは江戸時代から。鰹節は「勝男武士」という漢字を当てることもあり武士の贈答品として重宝され、土佐藩は各浦方（※）から鰹節を集めては幕府へ献上していた。その浦方のひとつが現在の土佐清水市。土佐清水で作られる鰹節は品質や生産量が安定しており、文政5年（1822年）の「諸国鰹節番付表」では最高位となるなど、最高級の献上品として知られていた。この頃、土佐清水の鰹節製造で有名だったのが「山城屋（やましろや）」という豪商で、中浜（なかのはま）を拠点に1830年頃、隆盛を極めていたと伝えられている。現在、その中浜で宗田節（そうだぶし）を作っている「新谷商店」の4代目・新谷重人（にいやしげと）さんは「幕府に献上されていたような歴史があって、今の自分たちの仕事がある。人が築き上げ、地域に根付いている文化を大切にしていきたい」と話してくれた。

※浦方…海辺、漁村の称

土佐清水市では昭和30年頃よりソウダガツオを使った宗田節の製造が始まり、現在は宗田節の産地として有名。それも鰹節製造の地盤があってこそだ。

高知の方はすぐ友達になれるすね。素晴らしい人柄。（愛媛県・40代） はみだしコラム

いの町 氷

毎年同じ日に届く氷室の氷

いの町本川（ほんがわ）にある「手箱山（てばこやま）」では、冬の間に山中の氷室に雪を詰めて貯蔵しておき、6月1日になるとその雪（氷）を飛脚便で土佐藩主に献上していた。城までは、現在のいの町北部と高知市行川（なめかわ）を結ぶ近道を使っていたため、今ではその道は「雪道」と呼ばれている。

この史実を伝承しようと平成元年から行われていたのが、毎年6月1日に高知県知事に氷を「献上」する行事。36年にわたってこの行事に携わっていた和田守（わだまもる）さんは「最初は、昔に倣って雪道を実際にランナーが走って知事に届けたんです。地域資源を大切に、そして誇りに思う気持ちがつながれてたんですよ」と話す。「氷が溶けんうちに急いでお届けせんといかん」。先人から受け継がれた熱い気持ちが感じられた。

仁淀川町 お茶

藩主も愛飲したお茶 受け継がれる誇り

実はお茶の名産地である高知県。中でも県内屈指のお茶の生産地として知られる仁淀川町の歴史は古く、400年にもなるといわれており、江戸時代には藩主にも献上されていたという。「『坂本』で摘まれたお茶が献上されよったという話は聞いたことがあります」。そう話すのは、池川茶業組合の山中忠一（やまなかただかず）さん。「坂本」とは、かつて多くの茶農家がいた、町内でも有数の茶の生産地で、山中さんの茶畑がある同町竹ノ谷からもほど近い場所にある。「仁淀川町でお茶作りを続けてこられたのも、藩主に献上して愛飲されていたという歴史があり、誇りを持ってお茶を作ってきた先人たちがいたからです。若い世代にもつながっていけば」と思いを語ってくれた。

コラム

土佐藩から幕府へ 土佐の産業発展の礎に

江戸時代に土佐藩から幕府へ納められていた献上品の中でも、代表的なのが「土佐和紙」と「土佐材」。

1000年の歴史を誇るといわれる土佐和紙は、戦国時代に「土佐七色（なないろ）紙」と呼ばれる7色に染められた和紙が開発され、これが江戸時代に幕府への献上品として土佐藩の保護を受けたことから、広くその名が知られるようになった。

土佐材が全国的に知られるようになったのは、大阪城築城時に豊臣秀吉から日本一のお墨付きをもらったことがきっかけ。江戸時代に入ると、大阪城や伏見城（京都府）の修築、大阪の街の復興などにも多くの土佐材が使われた。そして藩の御用木として、本山町の白髪山（しらがやま）のヒノキや、馬路村の魚梁瀬杉（やなせすぎ）など、今も有名な土佐の木材が幕府に献上されていった。

今も身近なところで使われている土佐和紙や土佐の木材には、先人たちの誇りをかけた思いが息づいている。

高知へ年に5回は行きます。日帰り旅行プランをご紹介してください。（愛媛県・30代）

土居廓中

廓中最古とされる武家屋敷で城下の暮らしを体験する

土居廓中の中心部には、今も竹やうばめ樫の生垣に囲まれた武家屋敷が立ち並ぶ。中でも最も古いとされる「野村家住宅」には、武者隠しや玄関脇の塀重門（へいじゅうもん）など、当時の構造がそのまま残っている。

安芸城・土居廓中の歩き方

高知の城下だけでなく、土佐藩の各地にあった城下町の趣きある街並み。その中でも安芸市の安芸城・土居廓中には、今も武家屋敷が残されている。歴史に詳しい案内人と一緒に古い街並み散歩にでかけよう。

安芸の城下町は代々続く武士のまち 色あせない城下の暮らしと風景

安芸市に今も残る、「土居廓中（どいかちゅう）」と呼ばれる古い街並み。その歴史は、鎌倉時代末期にこの地にお城を築いた安芸氏にまでさかのぼる。さらに江戸時代、土佐藩の重役である家老の五藤（ごとう）氏が町の整備を進めると、その後の明治期までも「廓中に入るには頬被りや鉢巻をとった」といわれるほど、長きにわたって城下町の文化が受け継がれてきた。安芸市でまち歩きガイドを務める根木さんは、「よく見ると、実は当時の町割りが今も色濃く残っているんですよ」と話す。例えば、有名な観光名所である「野良時計」から北へ少し歩いたところに流れている水路は、もともとは、武家屋敷が建つエリアと町人街のエリアを隔てていたものなのだとか。さらに「安芸市立歴史民俗資料館」などがある安芸城跡を目指して歩いてみると、時代映画のセットのような風情ある光景がそこかしこに。色あせない城下の暮らしを感じることができる。

教えてくれたのは
安芸市観光ボランティアガイドの会
根木（ねぎ） 勢介（せいすけ）さん
地域の観光ガイドボランティアの中でも、熟練のガイドさん。戦国時代の土佐の武将など、安芸市の歴史や見どころに詳しい。

はみだしコラム
初めて読みました。高知を身近に感じた。高知家の仲間入りしたい。（熊本県・40代）

コラム

高知の城下町めぐり

高知の城下町といえば、高知城がある高知市街地が思い浮かぶが、実は江戸時代の土佐藩には、城下町の機能を備えたまちが各地にあった。ここで紹介した安芸城・土居廓中をはじめ、西部の中村（現在の四万十市）には「中村城」、四国山地の本山（現在の本山町）には「本山城」等々、それぞれの地域で城下町が広がっており、藩主の家臣がそこで領地を守っていたという。現在、これらのお城の建物が残っていないのは、江戸時代の初期に幕府から「一国一城令」が出され、高知城以外のお城の取り壊しが命じられたため。それでも今日、そうした各地の城跡を訪れると、郷土の歴史を伝える施設があったり、歴史のロマンあふれる雰囲気があったりと、その魅力を感じることができる。

安芸城跡

四万十市
郷土博物館

水路と大通り

安芸城・土居廓中へと続く安芸城下の「追手筋」

土居廓中と安芸の市街地を一直線で結ぶ旧道は、実は当時の城下町におけるメインストリートで、高知城で言うところの「追手筋」のような場所だった。安芸城跡に近づくにつれ、古風な屋敷跡や城下町の町割りが見えてくる。

瓦練塀

雨風をしのいできた伝統的な安芸瓦の壁

瓦を何層も並べた土蔵や家の壁は「水切瓦」、平たい瓦を何重にも重ねた壁を「瓦練塀（かわらねりべい）」と呼ぶ。これらの建築は、この地域独特の様式で、廓中の至る所で見ることができる。

海沿いの街並み

城下の暮らしから生まれた海沿いに広がる商いの町

海沿いのまちである安芸は、昔から物流や交通の要衝だった。そのため海から離れた廓中には武士が、海岸沿いには商人が住むという町割りであった。安芸市の海沿いには今も、商店などが多く立ち並んでいる。

お酒の文化など、連載してほしい。（岡山県・50代） はみだしコラム

TOSA SPICE WORLD!

高知の薬味の底力

vol.3

今回は やっこねぎ

キラリ、そして「ピリリ」と放つ存在感
高知の食文化に欠かせない
辛くて香り高い「薬味」の数々
歴史、産地、そしてその薬味を使った料理のこと
もっと知りたくありませんか?

太陽のめぐみをいっぱいに受け、青々と輝くやっこねぎ。栄養価も高く、疲労回復や風邪の予防、美肌や代謝の促進にも効果があるといわれている。

やっこねぎは収穫までの数ヶ月が正念場。生育に大きく関わるかん水管理や、日差しが強くなる朝方の遮光などを毎日徹底して行う。

土壌環境もやっこねぎの生育に関わる大事な要素。土が固くならないよう有機物を混ぜて土の湿り具合を調整し、ふかふかの沃土(よくど※)を作り出す。
※地味の肥えた土壌・土地

話し手
香美地区園芸部やっこねぎ部会 部会長
宮地(みやち) 泰範(やすのり)さん
香南市出身。やっこねぎを栽培して24年。近年はSNSを活用した産地PRにも力を入れている。

何にでも使えて万能な薬味の代表格

青ネギの一種である「小ねぎ」は、さまざまな料理で広く利用されている万能薬味。通常の青ネギに比べると、緑色の部分が細く、香りや食感がとても柔らかいことが特徴で、生のまま薬味として用いられるだけでなく、加熱して甘みやコクを一層引き立てて使うなど、調理法が豊富なのも大きな魅力だ。高知県では、県内の広い地域でハウス栽培されている野菜の一つであり、中でも香美市土佐山田町を発祥とするブランド「やっこねぎ」は有名である。現在、多くの県民に「小ねぎ＝やっこねぎ」という認識が行き届いているのも、おそらくこの食材の存在があったからだろう。

やっこねぎ発祥の地である香美地区では、現在、やっこねぎ部会の方々を中心にハウスを利用した高品質なやっこねぎ作りが営まれている。

緑の葉の部分が細く、香りの高いやっこねぎは、全国の市場で高く評価されている。現在は県外への出荷が主だが、収穫期には高知市にある「とさのさと」に陳列することも。

土佐山田町で生まれた「やっこねぎ」の歴史

高知県で「やっこねぎ」の生産が始まったのは昭和52年のこと。当時、九州で流通していた「万能ネギ」（＝小ねぎの一種）に魅了された生産者が、その種を土佐山田町に持ち込み、5人の地元生産者によって栽培が始まったことがきっかけ。当初は賛同者も少なく、栽培方法も試行錯誤の連続だったそうだが、土壌環境を整えることで品質が向上し、徐々に生産が拡大していった。そして昭和54年、本格的に全国販売が始まり、その際に初めて「やっこねぎ」という名前が付けられることに。名前の由来は、小ねぎの中に「奴（やっこ）」という品種があったことや、薬味として相性の良い「冷やっこ」の存在、そしてやっこ凧が空に舞い上がる様子に商売の繁盛を願ったことにあるそうだ。

ネギの香ばしさが楽しめる「やっこねぎのおにぎり」や、ネギ・ミョウガ・生姜の3つの薬味をふんだんにあしらった「やっこねぎのサラダ」など、やっこねぎの魅力を知る生産者ならではの食べ方を発信。

やっこねぎの産地からおいしい情報発信

土佐山田町のやっこねぎ部会が運営するホームページやSNSを覗いてみると、やっこねぎを活用した独創的なレシピが次々と紹介されており、とても面白い。従来の薬味としての利用法に加え、農家ならではの豪快なネギ料理、フレンチやイタリアンにアレンジされたメニュー、さらには地元のパン屋さんとのコラボレーションによるネギパンなど、主役・脇役どちらでも楽しめる「やっこねぎ」の魅力的な料理が発信されている。

土佐山田町内のパン屋さんでは、地元のネギを使ったパンが販売され話題となった。

はみだしコラム　地元なのに知らないことだらけでその取材力に脱帽です。（高知県・60代以上）

「自分にとっては一定期間の現場でも、施主様にとっては一生のものになる」と教わったことを肝に銘じて慎重に。

下地を塗り終わったところに、漆喰をかまぼこ状に塗っていき、なまこ壁（※）を作る。塗った直後は茶色いが、1年ほどかけてだんだん白くなる。※壁に四角い平瓦（ひらがわら）を張り、その目地にそって漆喰を盛り上げて塗った壁のこと

憧れのバトン

今回の関係
左官弟子 × 左官師匠

師匠から技を継ぎながら魅力を伝えられる左官に

県内で産出されている石灰を原料にした「土佐漆喰（とさしっくい）」。「幼い頃は父の仕事に興味がなく、兄弟の中でも一番手伝いをしなかったんです」と話す望立さんは、土佐漆喰彫刻を継承する父、勉さんの下で左官業に就いて2年目。今は、高知市一宮（いっく）にある国の重要文化財「旧関川家住宅」で、勉さんから技や作法を教わりながら、全4棟の修繕作業に勤（いそ）しんでいる。「漆喰を塗る作業が楽しい」一方で、「一見簡単そうに見えても、少しの力加減で跡がついてしまうので均一に塗るのはとても難しい」と言う。「いつか父のようにきれいに塗れるようになり、頼りにされる左官になりたいです」と話す。また、天候により作業ができない日には、左官の仕事や土佐漆喰をより多くの人に知ってもらい興味を持ってもらうため、会社のホームページを制作している。「左官の後継者不足により、漆喰を作る業者も減りつつあります。伝統的な土佐漆喰を残していくために、もっと興味を持つ人が増えてくれたら」との思いを胸に、今日も技を磨いている。

左官弟子

松本（まつもと） 望立（みりゅう）さん

平成10年生まれ、安芸市出身。大学卒業後、県外でエンジニアをしていたが、土佐漆喰の技術を継ぐため令和5年に帰高し、父であり師匠である勉さんに弟子入り。

勉さんが手がけた、土佐漆喰の強度を活かした立体彫刻。得意の龍は今にも動きそうなほどリアル。

作る人、伝える人、つなぐ人、遺す人…
ここ高知で、そんな仕事や活動をしている人と
その人がリスペクトする人にスポットを当て
2人の関係性、双方の思い、そしてこれからのことなど
胸に秘めたる熱い思いをひもといていく

土佐漆喰の世界で自分なりの道を見つけてほしい

「自然の材料だからこそ少しの温度や湿度によって状態が変わるため、どの現場も初めての気持ちで挑んでいます」と話すのは、望立さんの父であり師匠でもある勉さん。長い経験の中でも、今手がけている「旧関川家住宅」のような土佐漆喰以外の代替がきかない重要文化財の修復作業は初めてといい、「残すべき建物を守る仕事に、息子と共に携われることを光栄に思います」と笑顔で話す。そんな勉さんが、中学生の頃祖父から教わったのがきっかけで作り始めたのが、土佐漆喰彫刻の龍。これまで自分が楽しくて大小さまざまな龍を作ってきたが、今は「自分が作る龍を見て、土佐漆喰に興味を持ってくれる人が増え、それが息子の手助けになれば」という思いで手がけている。そして「今後はより立体的で、躍動感のある龍を作りたい」と話す。自身が土佐漆喰彫刻の龍に辿り着いたように、望立さんにも自分にしかできない方法で活躍してくれることを期待しているという。「息子には、漆喰の面白さや魅力を、より多くの人に広めていってもらえたら嬉しいです」。

お互いに得意不得意を補い合い、家でも現場でも一緒にいる2人。土佐漆喰の魅力を伝えたい思いは同じ。

左官師匠

松本（まつもと） 勉（つとむ）さん

「(有)左官松本組」代表取締役であり、「土佐の匠」にも認定されている左官。幼い頃から、土佐漆喰彫刻の名人である祖父の手伝いをしているうちに漆喰の世界にはまり今に至る。

はみだしコラム　きれいな川に棲む魚類を特集してほしい。（愛知県・50代）

ワカモノがゆく！ vol.3

土ノナェ文ノヒノ体験記

高知県内各地で脈々と継承されてきた地域の文化を、初めて触れるワカモノたちが体験！
今回は、高知市で毎週開催される日曜市で、地元の高校生が伝統的なテントの組み立てに挑戦。

日曜市の風景を作り出す伝統的なテントは雨風が強い高知の気候にも対応

約350軒にも及ぶ個性豊かなお店が軒を連ねる日曜市。その独特の雰囲気や景色を生み出しているものの一つが「テント」だ。多くの出店者が使用しているのは、深い緑色の大きな天幕が目を引く伝統的なテントで、天幕を支える骨組みは、木・鉄骨・竹などの資材が使われており、改良が重ねられてがっしりとした造り。この大きな天幕のおかげで雨が降っても傘を差さずに軒から軒へと移ることができ、訪れた人は安心して買い物を楽しむことができる。

今回は「街路市青年団」の協力のもと、「伝統的な日曜市のテントの組み立て」に高知商業高等学校のジビエ部に所属する高校生が挑戦。ジビエ部は定期的に日

小さい頃から見てきたテントを組み立てるのは新鮮でした！

体験者（代表）

やまもと　いちか
山本 苺花さん

高知市出身。高知商業高等学校2年生。ジビエ部に所属（部長）し、商品開発や日曜市の出店などの活動を通じて、森林を守る循環型社会について学んでいる。

子どもたちを皆で育てていこうという気構えが伺える地域だなぁと思ったことでした。（熊本県・60代） はみだしコラム

高知市

日曜市

江戸時代から始まったとされ、300年以上の歴史を誇る「日曜市」。毎週日曜に高知城のお膝元である追手筋の片側2車線を使って行われており、約1kmにわたって出店者が軒を連ね、早朝から多くの人でにぎわう。県内では日曜市のほか、火曜市・木曜市・金曜市・土曜市と曜日ごとに街路市が開催されている。

問い合わせ先／088-823-9375
（高知市商業振興
・外商支援課 街路市担当）

1.青年団の皆さんと一緒に組み立てながら仕組みを理解する高校生たち。
2.講師を務めた街路市青年団の皆さん。 3.天幕と骨組みの部分を紐でしっかりと結ぶ山本さん。 4.定期的に日曜市に出店する高知商業高等学校ジビエ部。ジビエを使ったハンバーガーなどを販売。

曜市に出店しており、この日は特別に伝統的なテントを使って出店することに。

高知城に見守られながらにぎわう日曜市は若い世代に伝えたい高知の文化

「早い人は1人で10分もかからず組み立ててしまう」という話に驚きながらも、青年団の皆さんの指導の下、熱心に説明を聞きながら手際よく骨組みから組み立てていく高校生たち。ジビエ部に所属する高校2年生の山本さんは「日曜市に並ぶ伝統的なテントには一体感があって、なじみのある景色です。普段から出店をしているので、自分も日曜市という高知の文化を守っていきたいです」と話してくれた。

そしてジビエ部のテントの組み立てが終わると、自らの出店場所に戻ってお客さんと笑顔でコミュニケーションを交わす青年団の皆さん。その内の1人である西熊希民子（にしくまきみこ）さんは「地元の高校生にも、日曜市を通じていろいろな人と交流し、つながって、高知の文化に触れてもらえたら嬉しいです」と笑顔で話してくれた。

はみだしコラム 「とさっ子タウン」の名前を目にしていたが中身を知らなかった。ボランティアがあれば行きたい。（高知県・30代）

つないでつむいで 県史編さん室

高知県史(自治体史)とは?

高知県について伝え残されたさまざまな資料を調査し、本県の歴史を詳細に記したもの。郷土の歴史を知る、大切な手がかりだ。

御幣が飾られ、供物が供えられた「三階棚」の前で「三十三度礼拝神楽」の儀式を行う太夫。五色のシデで飾られた「綾笠(あやがさ)」を被る。綾笠の裏には、五芒星(ごぼうせい)と九字(くじ)を書いたものもある。

【右下写真】棚の周りの注連縄に飾られた「ヒナゴの幣」【左下写真】祈祷殿の近くの集落「影仙頭(かげせんとう)」の風景

土佐・物部「いざなぎ流」の世界

香美市物部(ものべ)地域には、「いざなぎ流」と呼ばれる民間信仰が伝承されている。病気治しの祈祷(きとう)をしたり、失せ物や吉凶を占ったりなどといった様々な技法を、「太夫(たゆう)」と呼ばれる地域の宗教者が伝えてきた。

いざなぎ流の儀式は、神々の由来を物語る「祭文(さいもん)」を唱え、神々をあらわす数多くの「御幣(ごへい)」を紙で作って祭るのが特徴。「式王子(しきおうじ)」や「反閉(へんばい)」など陰陽道(おんみょうどう)ゆかりの呪術を用いることでも知られている。高知県史編さん民俗部会では令和6年10月17日、いざなぎ流の大祭である「日月祭(にちげつさい)」の調査に香美市物部町押谷(おすだに)を訪れた。

＼県史HP／

＼県史編さん室facebook／

いざなぎ流「日月祭」

今年８年ぶりの開催となる日月祭は、月の出を拝む行事。祭場となる祈祷殿（きとうでん）の前に祭壇が作られ注連縄（しめなわ）が張られ、祭りの舞台を悪霊から守る「ヒナゴの幣」が飾られていた。

日没から儀式が開始。静かな山中は、太夫の祈りや僧侶の読経の声、そして太鼓とホラ貝の音に包まれ、月の神を迎える異空間となった。そんな中、太夫達は数時間にわたり、幣を持って繰り返し礼拝を行った。

今回は、修行を積んできた弟子に太夫としての免許を与える「許し」の儀式も実施。許しを受ける際、新たな太夫は神聖な米粒を受け取り、「ますます精進いたす」と答えていた。

当日はあいにくの曇りだったが、夜11時頃におぼろ月が浮かんだ。時を同じくして祈祷殿の中では荒ぶる神を鎮める「荒神鎮（こうじんしず）め」の儀式が行われ、日月祭は幕を閉じた。

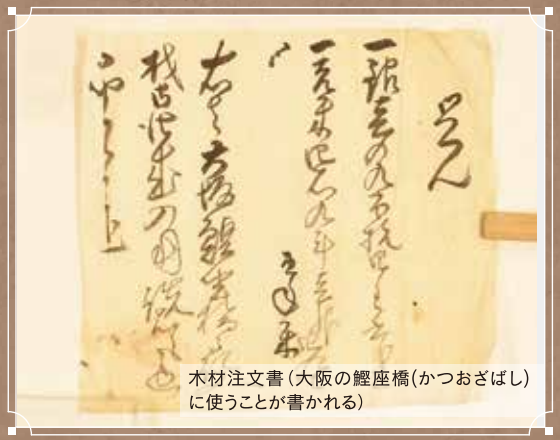
高知には、いざなぎ流のような民間信仰がまだ確かに息づいている。高知県史ではこうした暮らしの中の信仰も記録していく。

第十回　馬路村魚梁瀬

史料が語るもの語

県史編さん室では、博物館や公的機関に所蔵される史料だけでなく、地域に残る史料の調査も行っている。馬路村魚梁瀬（やなせ）で大切に伝えられてきた「門脇家文書」の調査では、江戸時代における土佐藩の山林管理の様子が明らかになった。

木箱から文書を１点ずつ取り出し確認する



木材注文書（大阪の鰹座橋（かつおざばし）に使うことが書かれる）

江戸時代の土佐の山林管理と魚梁瀬・門脇家

令和６年４月、現地を訪問し資料を確認。持ち主の許可を得て編さん室で借り受け、調査を実施した。約４か月かけて３２６点ある史料の目録作成、画像撮影と近世部会による内容確認を行った。

調査の結果、門脇家が江戸時代に土佐藩の御山番（おやまばん）などを勤めていたことなど、その由緒が分かった。ほかにも木材に関する記録が多く残り、木材の注文、他国から木を盗む人がいるとの知らせなど当時の山の生活の様子がうかがえ、土佐国内の注文だけでなく、今も大阪市西区に地名が残る「鰹座橋（かつおざばし）」という橋に使用する木材の注文などもあり、魚梁瀬から切り出された木材がどのような場所で使われていたかを知ることができた。

高知県は全国一の森林率８４％を誇る。現代につづく森林がどのように受け継がれてきたのか、森林に関わる歴史の解明は、新しい『高知県史』にとって重要なテーマの一つ。今後も継続して調査を行っていく。

高知県の歴史に触れる

県史特集

一條さんの町 中村

今回のテーマは、土佐の小京都・中村の歴史。
戦国時代に京都からやってきた公家・一條氏は
中村を発展させ、文化を伝えていった。
その誇りは、いまも中村の人々に受け継がれている。

四万十市郷土博物館所蔵

四万十市郷土博物館所蔵

江戸時代の中村市街地を描いた古地図（中央）と、一條教房の跡を継いで土佐一條家を率いた、2代目・一條房家（ふさいえ）の肖像画（右）。古都らしいエリアや行政機能があるエリアなど、町割りはいまも残されている。

幡多に逃れた一條氏がその地に深く残した今も息づく文化とは？

「土佐の小京都」と呼ばれている、四万十市の中村市街地。その由来は、十五世紀に京都からこの地にやってきた一條教房（いちじょうのりふさ）と、その後の「土佐一條氏」によるまちづくりにまでさかのぼる。「一條大祭」といったお祭りが例年開催されるなど、今でも地元住民に親しまれる一條氏は、中村の人々に何をもたらしたのだろう。今回は、四万十市教育委員会市史編さん室の川村慎也室長にお話をうかがった。

「よく『一條氏が京都を模して碁盤の目のように町割り（道路や区画の整備）をした』と言われますが、実は、それを明確に示す資料は残っていないんです」と川村室長は話す。一條氏による開発はもちろん、それ以前からあった町割り、江戸時代に土佐藩主の山内家が整備した武家屋敷（行政機関）など、時代を重ねるごとに、中村の街は横に縦に開発されてきた。その経緯が、いわゆる「碁盤の目」の由来かもしれない。それでも川村室長は、「一條氏の影響は、目に見えない、もっと深い文化のなかに残っている」と言う。

「天神橋商店街」を歩きながら、当時の町並みを話してくれた川村室長。指差す先には「一條神社」が。

辺境の地が最先端の文化のまちに地元への自信が芽生えた

一條教房と言えば、当時の朝廷で「関白」、現在で言うならば総理大臣を務めたような存在。そんな政治の大物が、まだまだ辺境の地だった中村にやってきて、地域を発展させていった。「不破八幡宮」という優美な神社を建立したり、その対岸にある一條氏ゆかりの「坂本遺跡」からは、大陸からの渡来品まで出土している。つまり一條氏は、当時の京都や海外の最新の文化を、中村の人々にもたらしていたのだ。「それこそが、中村の人々が地元をポジティブに捉え直すきっかけになったのでは」と川村室長は指摘する。「『中村は辺境の地じゃない。京都の雅な文化がある、一條さんの町なんだ』という自信やアイデンティティが、中村の人々に芽生えたんです」。

一條氏以後も続く小京都のまちづくりその歴史は今もつづく

天正2年（1574年）、長宗我部元親の策略により五代目・一條兼定（かねさだ）が豊後（大分県）へ敗走したことで、一條氏は中村から姿を消してしまう。しかしその後も、中村の人々は「一條さんの町」を大切にしたまちづくりを続けた。「大文字の送り火」といった季節の行事はもちろん、江戸時代末期には地元有志が、土佐一條家を祀った「一條神社」を市街地の中心に建立。それは時の為政者であった山内家にも否定されることなく、以来「一條大祭」は百五十年以上続き、親しみを込めて「いちじょさん」と呼ばれている。「こういった地域の歴史を、あらためて『四万十市史』として編さんする取り組みがスタートしています」と川村室長。一條さんがもたらした公家文化の香りは、今も中村の町に残っている。

中村城跡にある「四万十市郷土博物館」から見下ろす、中村市街の風景。

一條神社（上）は、一條家の御廟所（ごびょうしょ）跡地とされる、市街地中心部の小高い「小森山」の山頂にある。例年11月に開催される一條大祭（下）は、地域住民にとって秋の風物詩だ。

昭和47年、大阪府生まれ。学生時代の専攻は考古学。平成13年、文化財担当者として四万十市役所に就職。「四万十市郷土博物館」のリニューアルなど、多岐にわたる市の文化事業に携わっている。

川村（かわむら） 慎也（しんや）さん

令和高知の妖怪大図鑑

バケペディア

其の三

AM3:00　80%

たたみたたき
畳叩き

某アパート深夜3時
トントントントントントントントン
足音？
こんな夜中にうるさいな何してるんだ？
トントントントントントントント

とさぶしからの贈り物

1

池川茶園　P13

お店で使える1000円分のスイーツ券　3名様

仁淀川町の上質な茶葉を使ったスイーツが楽しめる「池川茶園」。プリンやパフェなどお好きなものを味わって♪

2

JA高知県 香美地区園芸部 やっこねぎ部会　P16

やっこねぎ 100g（1束）　5名様

高知県香美地区産のやっこねぎ。薬味はもちろん、煮込みや炒め物など、主役・脇役どちらでもおいしく使える万能食材。

3

P07

ひまわり乳業 株式会社

ひまわりギフトセット　2名様

常温保存ができるため、お土産にもぴったりな「ロングライフリープル」をはじめ、トートバックやステッカーなどが入ったセット。

4

QUOカードPay1000円分　10名様

※こちらの賞品をご希望の方は、応募時にスマホで受信できるメールアドレスを記載してください

応募締切／令和7年3月20日

クイズとアンケートに答えて読者プレゼントに応募しよう！

クイズ　坂本龍馬が生まれ育ったまちの名前は？

❶スマホから右のQRコードを読み込んでwebサイトにアクセス
❷応募フォームより必要事項を明記し、読者プレゼントに応募する

※QRコードが読み込めない場合はLINEアプリから友だち登録していただき、ご応募ください。
とさぶし

※読者プレゼントの応募は「とさぶしwebサイト」もしくは、官製ハガキから応募できます。官製ハガキで応募される場合は①年代②性別③お住まいの都道府県④とさぶしを手に入れた場所⑤とさぶしを知ったきっかけ⑥良かったコーナー（複数回答可）⑦満足度（10段階評価でお願いします）⑧とさぶしを読んで実際に行ってみたい、食べてみたいなど意識変化はありましたか？（はい／いいえ）⑨「はい」の方。その理由を教えてください⑩とさぶしを読んで、実際に冊子掲載店や場所に行ってみたり、商品を購入してみたりしましたか？（はい／いいえ）⑪クイズの答え⑫希望する商品⑬氏名⑭発送先のご住所⑮電話番号⑯メールアドレス（※デジタルギフトご希望の場合）⑰はみだしコラム（※）をご記入の上、下記の宛先まで締切日（令和7年3月20日）必着でお送りください。〒781-0081 高知市北川添10-15 株式会社ほっとこうち

●読者プレゼントの応募は、1人1回とさせていただきます。 ●プレゼントの発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。 ●いただきました個人情報はプレゼントの発送にのみ使用します。
※とさぶし48号より、各ページ下にコラムの掲載を始めました（今回応募していただいたコラムは50号に掲載予定です）。とさぶしに関する「感想」（30文字程度）をお寄せください。掲載は抽選となります。
（例）毎号楽しく読んでいます。高知のお酒文化をもっと知りたい！（高知県・30代）
【誤植のお詫び・訂正のお知らせ】とさぶし48号P15コラムに誤りがございました。つきましては、右記のとおり訂正させていただきます。 誤）西村　晟（にしむら　じょう）さん → 正）笹岡　晟（ささおか　じょう）さん
読者の皆様、関係者の皆様にご迷惑をおかけいたしましたことを、深くお詫び申し上げます。

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI
TOSABUSHI
とさぶし

https://tosabushi.com

webリニューアル!見てちゃ!

発行
高知県文化生活部文化国際課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号（本庁舎5階）
Tel 088-823-9793　Fax 088-823-9296
E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp

発行日：令和6年12月31日（季刊）

企画　とさぶし編集委員会
制作　ほっとこうち

バックナンバーの入手方法・お問い合わせ

高知県文化生活部文化国際課（上記）まで
ご連絡ください。

Facebook、LINE、Instagramでも情報配信中！

Facebook　LINE　Instagram

特集

お城が見守るまち

P02 お城が見守るまち
P04 あらためて高知城、私はココが自慢！
P06 高知の城下の歩き方
P09 土佐藩・山内家のリアルに触れる
P10 令和の城下町の光景
P12 土佐藩主ゆかり 献上品の話
P14 安芸城・土居廓中の歩き方

連載

P16 高知の薬味の底力【やっこねぎ】
P18 憧れのバトン【左官弟子×左官師匠】
P20 土佐文化体験記【日曜市のテント】
P22 つないでつむいで 県史編さん室
P24 県史特集【一條さんの町 中村】
P26 バケペディア【畳叩き】